

日中戦争期の中国におけるドイツ軍事顧問

フライブルク大学教授 ベルント・マーチン

(進藤裕之 訳)

「戦闘そのものの他に、戦略及び戦術に関してドイツ人顧問は中国の抗日戦を手助けした⁽¹⁾。」日中戦争初期に関する西側の研究はよくこのように指摘するが、今のところドイツ人顧問の直接的な影響は証明されていない。蒋介石の下に派遣されたドイツ人顧問の活動は当初より国民党指導者の間でも議論的となっており、ドイツを含む外国ではさらに問題となっていた。そのため、顧問団のことは秘密扱いされてきた。一方で日本人研究者の間では近代中国軍の建設と国民党政府の安定化に関するドイツの役割は過大評価されるが、中国側からは過小評価される傾向がある。

国防省を除くベルリンの政府官庁内においても中国に派遣された顧問団の活動に熟知していた者はいなかった。彼らは私的契約に基づいて中国で活動していたからである。その上、ドイツ軍事顧問団に関する一次史料が限られていることも問題である⁽²⁾。

南京の第二文書館にある中国の史料⁽³⁾は空白をある程度埋め

るのに役立つかもしれないが、現在のところ、ごく一部しか公開されていない。しかしながら、最後のドイツ主席顧問であったアレキサンダー・フォン・ファルケンハウゼン (Alexander von Falkenhausen) の個人文書⁽⁴⁾に、原文書の写しが数多く含まれているので、一次史料の欠如を十分補完してくれる。その他の史料として、「上海の戦闘⁽⁵⁾」に関するドイツ陸軍最高司令部の内部メモ、一定の目撃証言、そしていくつかの研究論文がある。

ドイツ顧問団と国民党政権の安定化

国民党の支配が広東及びその奥地にしか及ばなかった一九二〇年代初期において、孫文は広東の経済成長を促進し、主に地方軍であった自らの軍隊を正規の部隊に再編するためにドイツの支援を求めた⁽⁶⁾。ドイツが西側列強の中で唯一、一九二一年に最初に中国を対等の国として扱ったので、孫文はドイツに魅力を感じた。

しかもドイツは無力で形式上の政府であった北京政権と平和条約を締結し、不平等条約から得た全ての特権を放棄した。中国のナショナリストの間でもドイツを味方に感じる者が多かった。中国と同様、ドイツもアングロ・サクソンの世界的優越性に苦しんでいたからである。そして、ドイツは最近君主制を放棄し、共和制を採用していたことも中国と同じであった。ドイツは中国の接近をしばらくは拒否したが、蒋介石が中国共産党と一九二七年に絶交しコミンテルン顧問団を退去させた後に、南京に政権の座を戻した国民党政権は再びドイツに目を向けた。一九二八年末にマックス・バウアー (Max Bauer) 大佐⁽⁷⁾の説得に成功し、国家再建に関する事項について主席顧問に就いてもらった。

ドイツは「上からの近代化」を信奉していたが、この思想は孫文の「国民三原則」、つまり、自由主義的民主主義制度の否定(権威主義的支配の採用)、軍の優位性、及び重工業を中心とした国家主導の開発計画と一致した。これらは、ドイツ顧問団と、蒋介石支配下の国民党右派が共有していた思想であった。

当初、ドイツ顧問団に多くの民間人が参加していたが、徐々に非公式軍事使節団に変身した。バウアー大佐は一九二九年、蒋介石とともに蔣の司令部から広西派討伐を指揮しており、その成功に決定的な貢献をした。戦略的な助言を与えるために彼が前線にいたことも間違いない。バウアーは戦場で感染した疱瘡で死亡した。後継者はドイツ国防軍の最も上級の将校であり、まだ秘密組

織であった参謀本部の長ゲオルグ・ヴェッツヘル (Georg Wetzel) 大将に決定した。ヴェッツヘルは一九三〇年四月に着任し、直ちに前線に派遣された。国民党左派と北部の軍閥の危険な連合を壊すためであった。

五次に渡る共産党討伐作戦⁽⁸⁾において、ドイツ軍事顧問の関与した度合いは様々であり、時にはドイツの将校が連隊レベルの作戦に関する決定に直接加わった。対照的に、ヴェッツヘルは一般戦略を提供しただけであった。広西ソヴィエトを徐々に締めつけたいわゆる「包囲作戦」は間違いなくヴェッツヘルとその後任者ハンス・フォン・ゼークト (Hans von Seeckt) の発想であった⁽⁹⁾。このように、中国内戦において蒋介石と国民党の勝利にドイツ軍事顧問団が決定的な役割を果たした。

粗雑に組織されていた国民党軍の能率を上げるために、全ての主席顧問は多数のメモを提出した。バウアーは陸軍要員を劇的に削減したいと考えており、ドイツ製の兵器で武装されドイツの野戦教範に基づく行動をとる訓練旅団を設置することを進言した。

しかし、このような提案は不意に出されたようであり、しかも自らのポストの安泰を懸念する高齢で高級な中国軍将校からは反感の対象となった。それに代わるものとして、一九三〇年末からモデル師団が三個新設された。人員が絶えず入れ替わる訓練旅団と異なり、このような師団は実際に戦闘で使うことが可能で、それによってドイツ側が推進する改革の効果について疑いに満ち伝

統に拘束された中国の参謀本部を説得することも可能であると考えられた。

一九三一年末までに三個師団がドイツの軍事専門家によって訓練されており、可能な限りドイツ製及びチェコ製武器で装備された。従つて、日本による満州占領に続いて戦闘が開始された際に、蒋介石は三万名の士卒から成るこれら三個の精鋭師団を掌握していた。一九三一年の冬、ヴェッツェルは中国側の指揮官たちと毎日協議し、満州で戦う中国の地方軍を観察した。日本側が邦人保護の名目で上海に海軍陸戦隊を上陸させたのを受けて、蒋介石はモデル師団二個（第八七師及び第八八師）を対日戦線に投入することを決定した⁽¹⁰⁾。ここで初めて中国軍は西側の水準に達した近代軍と戦うことになり、やがて七万名に達した日本軍に対して頑強に抵抗した。なお、日本側は激しく抵抗する中国側の部隊がドイツから武器及び訓練を受けていることを把握していた。第一次上海事件は、中国の精鋭師団が抹消される前に国際仲裁によつて終了した。しかし、中国軍が初めて日本軍と対等に戦ったのであり、ドイツの軍事改革案は試験に合格したかのようであった。

ヴェッツェルの下でドイツ軍事顧問団は最大勢力の六五人に達した。ドイツ側は南京に一九三二年に設立された「中央軍事学院」と、各地にあったその他の各軍種の学校で教鞭を執った。しかし一方で、ドイツ側によつて訓練及び装備された師団に一部の顧問

は残った。ドイツの近代兵器への換装と、その習熟訓練を完成させるためであった。あるいは同じ理由で新設された訓練部隊に配属された。一九三七年までに中央軍の三十万名のうち八万名がドイツ側によつて最精鋭部隊となるよう訓練され、国民党の軍の中核となった。さらに約一万五千名の中国側の士官は、ドイツ人教官による特別課程で訓練を受けた。ドイツの影響が強かった参謀大学においても、さらに二千名もの卒業生がドイツ流の戦略思想の影響を強く受けていた。それぞれの士官グループは中国軍のあらゆる部署に配属され⁽¹¹⁾、「革新者」として伝統的な軍人と対立することが多かった。

ドイツで一九三三年にナチス政権が実現したことを受けて顧問団は半公式使節団に格上げされ、第三帝国の修正主義的権力政治の積極的要素として活動した。ヒットラーとナチス党は、結束が固く軍事的志向が強い社会を持つ日本を東アジアにおける最有力国と見て関心を持ったのに対して⁽¹²⁾、ベルリンの伝統的エリート—外交官、経済学者及び軍部—は中国を東アジアにおける第三帝国の当然のパートナーとして捉えた。ドイツ経済は、中国を将来の市場として考えていた。一方で軍部は、兵器生産の必需品であったタンクステンその他の天然資源を中国から入手できると目論んでおり、さらに中国を新兵器の試験場として活用できることも期待していた。

ヴェッツェルは軍人であったので、兵器購入の調整役には不向

きのものであった。そのため、彼は中国の要請によって国防軍の創設者ハンス・フォン・ゼークトと交代させられた。しかし、ゼークトは主に既存の経済協力関係を深めるための名目の長の役割しか果たさなかった。彼が新しい契約を締結している間に、彼の「参謀長」役であり、当初は軍事問題を担当していたファルケンハウゼンが、(一九三五年五月三日に)ドイツの専門家の全ての活動―兵器生産だけでなく軍事に関するもの―を調整する主席顧問になった。

数年の内に国民党中国はドイツ兵器の最大の消費者となっており、一方で第三帝国は中国のタングステン輸出の七十二%を購入していた。しかし、ドイツの指導の下で国防省を設置するとか、ドイツ側に訓練・装備された師団を九個から四十一個に増やすといった長期計画は主に一九三六年十一月の日独防共協定締結によって挫折した。中国の視点から言えば、同協定はドイツが中国の宿敵たる日本に接近していたことを意味した。以後、ドイツの東アジア政策は二つの広がる路線を進んだ。権力政治に関する事項については、ヒットラーは極東の反ボルシェビキ防波堤として日本に依存していた。一方で経済界と軍部は中国との儲かる経済上の接触を拡大していった。

日中戦争開始後数ヶ月の間に戦闘に参加したドイツ軍事顧問

中国軍隊の近代化であげた実績によって、蒋介石とその側近だ

けでなくドイツ顧問団もその成功の度合いを過大評価してしまっただかもしれない⁽¹³⁾。ファルケンハウゼンはそれまでは中国の防衛問題に関する助言しか与えていなかったが、一九三六年のメモを皮切りにもっと強い主張をするようになった。その中で彼は日本側に奇襲をかけ、日本軍を長城の北方へ押し返し中国北部から追い出すことを提案した⁽¹⁴⁾。彼の大胆な構想は消極性で知られていた中国側の闘志を湧き立たせることを意図した可能性がある。中国側は満州事変の際、日本との戦闘を回避したが、盧溝橋事件の後には日本側に抵抗した。ファルケンハウゼンのメモが中国側のこのような決定に大きな影響を与えたのは確かである。

一度戦闘が始まってしまえば、中国も日本も後戻りができなくなることは明らかであった。従って、盧溝橋事件が一九三七年七月七日に発生した時には大戦争の計画はなかったが、双方ともに譲歩しないで、少なくとも威信を少しでも高めようという強い意志を有した。戦闘が始まって間もなく、ファルケンハウゼンは蒋介石と七月十三日に会見し、その時に中国の総力を必要とする長期戦の話をした、とファルケンハウゼンは後に主張し⁽¹⁵⁾、蒋介石は賛成したそうである。しかし、局地的防衛戦をもって日本軍と戦うという最終決定は一ヶ月後によく下された⁽¹⁶⁾。

紛争の最初の数週間、中国と日本はともに戦闘を中国北部に限定したかったかのようにであった。両者とも静観という中国流の戦術に従った。それに対して、ファルケンハウゼンは、彼が受けた

プロシア風の訓練を反映してその場での軍事的決戦を求めた。

日本の航空部隊が北方の戦闘に活躍したので、南京に戻ったファルケンハウゼンは防空の問題に没頭した⁽¹⁷⁾。やがて彼は、一九三七年七月末から八月初にかけて、日本の攻勢が予想されていた北部へ旅行した。そこで彼は、長城沿いの防備は、日本の西への進出を防止するのに充分であるという結論に到達した⁽¹⁸⁾。しかし、日本の戦略は北京・漢口（武漢）及び北京・上海の鉄道線に沿って南に進撃することであった。中国北部には練度が低く、装備も貧弱な地方軍しか配置されていなかったため、効果的に防御することはできなかった。そのため、中国が日本を迎え撃つのもっとも適切な場所は一九三二年同様、上海と揚子江流域であることは明らかであった。そこにはドイツ側に訓練された蒋介石の精鋭部隊八万を含む三〇万の中央軍が配置されていた。

一九三七年八月、いつものように「事件」が起こった後に、中国軍が一九三二年以来共同租界の周囲に設定されていた非武装地帯に進出した。一九三二年の紛争に参加していた第八七師と第八八師の精鋭師団は第三六師とともに日本軍を降伏させる目的で日本租界を包囲した。ドイツ兵器で非常に強力に装備されており、ドイツの顧問も同行していたこれらの部隊が配備された直後に⁽¹⁹⁾市街戦が始まった⁽²⁰⁾。「ベルダン以来もつとも流血が多かった戦闘⁽²¹⁾」は、八月二十日に中国軍が黄浦江を突破したことによって頂点を迎えた。その間、南岸ではドイツの山砲で装備され

た連隊が揚子江上の日本軍艦を牽制した。その上、三個の精鋭部隊はドイツ製の装甲車と榴弾砲で装備された特別機械化部隊の支援を受けた。従って、中国側の最初の勝利を得るために、ドイツに訓練されドイツの武器で装備された部隊のほぼ全てが投入されたのである。

戦闘開始の日からファルケンハウゼンは中国側の司令長官の本部に滞在した⁽²²⁾。戦略決定に対する彼の影響を正確に把握することは最早不可能であるが、ドイツ最高司令部の報告において彼の貢献は度々言及された。彼は八月二五・二六日の夜行われた会議において中心的な役割を果たしたようである。その会議では、上海より北の揚子江沿岸に日本軍が上陸したことを受けその後の作戦が決定された⁽²³⁾。

南京から戻った国防副部長の前で中国側の将官たちは上海戦線の全域に渡って攻勢に移るべきか否かを検討した。日本の反撃の可能性があったので中国側の自信は急速に低下しており、むしろ日本軍を無血で中国奥地に引き入れて呑み込んでしまえばいい、という考えが浮上していた。ファルケンハウゼンはこのような中国の伝統的思考に反対した。自らの主張に説得力を持たせるために彼は孔子を引用し⁽²⁴⁾、まだまだ絶望的とは言えない戦闘を続けるよう中国側を説得した。ファルケンハウゼンは援軍が到来するのを待ちたかった。その中にはドイツの訓練を受けたか、あるいはドイツ兵器で装備された部隊があったが、彼はこれらの師団

を投入して日本の橋頭堡を攻撃しなかった。中国側はやがて折れてファルケンハウゼンの主張を受け入れた。その結果、上海の戦闘はさらに十週間長引いた。結果論であるが、ドイツ顧問によって訓練及び装備された近代戦闘部隊が完全消耗したことの責任の一端もファルケンハウゼンが負わなければならないことになる。

次に南京で防御戦を戦うか否かの問題が残されたが、中国側が驚いたことにファルケンハウゼンは頑固に反対であった⁽²⁵⁾。彼は上海の悲劇の二の舞を回避しなかったのである。今度はわずかに残った中国の近代的な部隊が壊滅することを彼は知っており、従ってその後は戦闘を広大な奥地に移して敵戦力を消耗させることを主張した。

上海で活動した同僚と異なり、北部の戦線に派遣されたドイツ顧問は活動を戦闘と防御陣地の視察に制限しようである。日本軍が済南鉄道線を突破した際に、ファルケンハウゼンの次に位する「三名の将軍⁽²⁶⁾」は蒋介石の意を受けて、中国統帥部から戦況の説明を受けた後、一九三七年九月二二日に北方へ派遣された。しかし、いったん南京から遠く離れた北方に到着してみると、現地の指揮官たちの非協力的な姿勢に直面させられた。ドイツ顧問が、固定式防御陣地を構築するとか指揮系統を中央集権化するといったような変わった提案をすれば、直ちに陣地を査察するため、に後方に送られ、数日間排除された。しかし後方を査察した際に、ドイツの将軍たちはそこを支配している混乱状態を目撃してしま

った。それは前線よりもひどい状態であり、特に軽傷で後方に下がっていた兵士の逃亡事件が多発しているのが問題であった。ドイツの将官たちは当地に滞在しても無意味であると感じ、毎日、電話で印象をファルケンハウゼンに伝え、南京に戻らせてもらえるよう彼に働きかけた。結局、ドイツの三名の将官は前線であり意味のある活動ができないまま三週間ほどして呼び戻されたが、特別列車に軍事顧問三名が乗って去るのを、中国側はあきらかにほっとしながら見送った⁽²⁷⁾。

開戦後三ヶ月間におけるドイツ軍事顧問の前線での活動は内容的にバラバラであり、個人的な勇敢さが示された少数の例外を除いてあまり成果を上げることはできなかった。中国側には彼らの助言は異質のもので不適切に映り、ドイツ顧問は中国側の不信と秘密主義に直面した。あるいは、ドイツ人が自らの西洋の軍事原理に固執し、直接戦闘に干渉して上海の例のように師団単位で中国軍が全滅するまで戦闘を長引かせてしまった。上海の軍事的失敗と、一般市民の犠牲も大きかった南京事件があつて初めてファルケンハウゼンと、おそらくは大多数のドイツ顧問は、プロシアの軍事ドクトリンを放棄した。今や彼らは中国の状況と軍事伝統により相応しい戦略を復活させることを薦めた。長期戦を戦い、機動力がある小部隊の度重なる攻撃によって日本の戦力を消耗させたかったのである。ゲリラ戦法は長い間、共産党軍によって成功裏に実行され、広西における赤軍討伐作戦では国府軍がそのよ

うな戦法を採用することにドイツ顧問は強烈に反対したが、今やファルケンハウゼンから唯一の効果的な戦略として支持された⁽²⁸⁾。上海陥落後、高級なドイツ軍人は二度と前線に呼ばれることはなかった。それから彼らは再び、軍事理論と長文のメモの作成に活動を限定した。

中国指導者に対する戦略的・戦術的助言

中国に着任以来、ファルケンハウゼンは大量のメモを作成し、それらによって国民党軍の近代化と中国の防衛に強い影響力を行使しようとした。中国側の要請に応じて作成されたメモもあったが、ファルケンハウゼンと彼の下にいた専門家が自発的に書いたものもあった。メモはドイツ語で書かれ、蒋介石直属の涉外担当部が中国語に翻訳したが、率直な批判はそのまま翻訳されずに適当にぼかされた例は多い。儒教の行動基準では總統その他の高官を批判することは許容されなかったし、外国の野蛮人が批判する場合はなおさらであった。中国の高官と折衝するに当たって、ドイツ側の主な顧問はだれもこのことを充分に理解することがなく、相手にあまりにもはつきりと批判を向け、あるいは提案をぶつけた。ファルケンハウゼンのみが、第一次世界大戦前に日本に配属されていたため⁽²⁹⁾アジアの心理を理解しており、あまり厳しい言い方をしなかった。彼のメモの婉曲的な言い回しは多くの場合、中国側の優秀さを賛美するものであったが、読者の注目を集める

ために物事を上手く繕う中国の慣習を考慮にいれて作成されたものであろう。彼のメモはこのような伝統的な中国の立場から見る必要があり、合理的な西洋の慣習に従って額面通りに受け取ってはいけない。

ファルケンハウゼンはそのようなメモを全部で二千件作成したが、多くの場合、彼は誤った提案をしていた。例えば、一九三六年末には西安で捕虜になっていた蒋介石を釈放するのに軍事力を使うべきだ、と度々主張した⁽³⁰⁾。このような状況では、そのような助言は死刑宣告に等しかった。一方でファルケンハウゼンは、蒋介石と良好な個人的関係を維持した。まずいくつかのメモにおいて、ファルケンハウゼンは蒋介石の権威主義的な指導を支持した⁽³¹⁾。ファルケンハウゼンはその前任者たちと同様、蒋介石の統治能力と中国国民を統合できる可能性にかなり期待していたからである。また、ファルケンハウゼンと蒋介石は通訳を介せずに直接会話することができた——皮肉なことにも共に共通の敵の用語であった日本語で流暢に話せたのである。しかも、親密な個人的関係があったため、ファルケンハウゼンはドイツによる講和のための仲裁を推薦することができた。このような仲裁におけるファルケンハウゼンの役割ははつきりと証明されたことがないが、上海陥落後、蒋介石がドイツ人を仲介者とした日本側からの講和の打診を真剣に検討したのはファルケンハウゼンの影響があったためであることは確かである⁽³²⁾。

一九三六年末から翌三七年初にかけて、ファルケンハウゼンは北部の防衛に関するメモを数多く提出した。この中には中国側に採用された提案もあった。ファルケンハウゼンの意見とは必ずしも一致しない場合が多かったが、何人かの中国側高官は日本側に對してもっと積極的に抵抗することを約束し、少なくとも書面上は中国北部における日本の膨張は断固として阻止しなければならぬというファルケンハウゼンの意見に同意した。

上海で戦闘が行なわれている間にファルケンハウゼンが作成した作戦関連のメモは一部しか残存していない。しかし、南京にいた彼のスタッフの専門家は、前線で得た印象についていくつかのメモあるいは報告書を作成した。例えば、中央国防学院にいた爆発物のドイツ人専門家は中国の軍事病院を訪問し、その状況にかなりの好印象をもち、特に、軽傷しか受けていない中国兵士の不屈の闘志に感心したと報告した⁽³³⁾。

ファルケンハウゼンが再び一般的な防衛上の検討事項を提案したのは上海陥落後であった。今度は彼も日本側が揚子江に沿って南京に進軍することを予想したが、南京を防衛することには反対であった。「私が思うには、現在重要なのは歴戦の部隊を再建し、戦闘のためのいい状態を維持することである。いかなる長期化した抵抗のためにも強力で有効な兵力が必要である⁽³⁴⁾。」ファルケンハウゼンは上海の軍事的大惨事の教訓を学んでいたが、政治的理由から今度は蒋介石が上海の限定的防衛を主張した。

日本軍が南京に入城した後に⁽³⁵⁾ファルケンハウゼンは状況の評価を提出した。その中で彼は日本軍の進撃方向を概ね正確に予想した。この分析を踏まえて、彼は始めて「小さな戦争」、つまり敵前線の後方における活動、を推薦した。そして全員が任務を遂行すれば中国は長い間に渡り抵抗することに成功するであろう、と樂觀的に結論付けた。一方で中国の士官の無能についてはかなり厳しく批判した。

しかし他方「日本軍の評価⁽³⁶⁾」と題するファルケンハウゼンのメモは中国側を喜ばせたに違いない。あるいはそれが主な目的であったかもしれない。彼があまりにも日本側の弱点を誇張したので、中国側の読者はどうしてそのような非効率的で無能な指揮のもとに置かれた日本軍がそもそも中国に侵入できたのかを不思議に思ったであろう。中国側に手交した版ではファルケンハウゼンは気を利かせて最後の一文を削除した。その一文とは、ドイツの二、三個師団の支援を得たならば日本軍の中国作戦は瞬く間に終結するであろう、という結論であった。この見解を残せば中国側にはあまりにも屈辱であったであろう。

確かに、日本軍は中国側が感じていたほど強くも優勢でもなかった。そのため、漢口で作成した数多いメモの中でファルケンハウゼンは日本軍に常に主導権を持たせないで、その側面を機動力がある小部隊をもって攻撃するという戦略を推薦した。

戦争開始から国民党の指揮下に置かれた共産党系の第八路軍は、

かつて成功裏にゲリラ戦法を実行した。一九三七年九月二十七日、保定北方の平型関⁽³⁷⁾において無敵のような日本軍の進撃に対する中国側の初めての勝利を収めたのは共産党軍部隊であった。フアルケンハウゼンはゲリラ戦法を「共産主義モデル」と呼ぶのを嫌悪したが、その成功からゲリラ戦法が唯一の効果的な抵抗の方法であるという結論に至ったと思われる。第二次世界大戦後、中共が中国内戦において最終勝利を収めた後で、彼は未刊の回想録の中で初めて共産党軍の戦略を高く評価した⁽³⁸⁾。

奇襲と包囲の戦略を採用してフアルケンハウゼンは国民党軍の日本に対する唯一の勝利となる台児荘（山東半島南部）の作戦の計画に成功した。数日後作成したメモの中でフアルケンハウゼンは勝利の功績は全て中国統帥部のものであるとした⁽³⁹⁾。そのように見せたほうが中国側をして同様の戦略を今後も採用せしめるであろうと思ったからである。フアルケンハウゼンは今回の勝利が根本的に重要であり、国民の間で最終的勝利への希望を高めたことを指摘した。日本はいずれ東アジアにおける勢力拡張方針を放棄せざるを得なくなるほど弱体化したという彼の結論はいつものことながら誇張であり、中国側の樂觀論を強化することを狙っていた。この大勝利の結果、ドイツ軍事顧問団が影響力を回復し、その後の戦闘に貢献できた可能性はあった。しかしフアルケンハウゼンの樂觀的な報告書が書かれた翌日、ヒットラーは日本に氣を使って顧問団を召喚することに決めた。

一九三八年一月一日、近衛政権は中国との交渉を打ち切って、講和交渉を望んだ現地の日本軍と反対に軍事的勝利による最終解決を求めた。このことは第三帝国にも決断を迫った⁽⁴⁰⁾。一九三八年二月四日、ヒットラーは軍部と外務省における伝統的エリートを排除し、代わりに上層部に自らのお気に入り任命した。これで常に中国寄りであった二つの残された保守勢力の牙城がヒットラーの支配下に置かれた。

ドイツ顧問団は急いで中国を去ることは抵抗したが、やがてベルリンの圧力に屈した。フアルケンハウゼンその他の顧問は手掛けていたいくつかの活動を終了させてから七月五日、中国側の温かい賛辞を受けながら武漢を特別列車で去った⁽⁴¹⁾。

結論

中国に派遣された外国顧問団―それが最初の顧問団であったソ連人、一九二七年からのドイツ人、その後一時期返り咲いたソ連人、そして一九四〇年からのアメリカ人のいずれであろうとも―の全てが、中国の軍の指導者及び将校団を完全に否定的に評価した点で一致していた。西側から見るとこの評価は正当化できるかもしれないが、一方で外国の軍人が中国の慣習について無知であったことをも表しており、外国の顧問団の努力が全て徒労に終わった大きな理由でもある。中国に滞在した最後の外国軍事顧問であったアメリカのウェーデマイヤー (Albert Wedemeyer) 將軍は、

中国人士官を「無能、不適切、訓練不足、総じてケチで非効率的」であるといい、司令部における混乱を次のように描いた。「中国側の混乱とごっちゃになった計画っぷりは理解を超えるものである⁽⁴²⁾。」彼の先任者であったドイツ人たちも似たようなことを表明している。一部の希な例外を除いて、中国人をプロシア風の軍人に変身させることは不可能であり、蒋介石を支持した伝統的な土地所有紳士階級を西側流の士官に変身させることはさらに不可能であった。

腐敗体質のような古い慣習は、共産主義者が主張し大衆の社会的要求を反映した画期的な措置によってしか廃止することはできなかった。ドイツ人に限らずその他全ての外国顧問に全面的に支持された国民党の近代化構想は孫文の構想に基づいており、上からの社会改革に依存していた。国の実状を無視したため、この構想は失敗せざるを得なかった。しかも開戦した後は一般大衆を考慮に入れた共産主義者の構想が国民党への挑戦となっただけでなく、より魅力的な選択でもあった。唯一共産党軍が日本軍に対して効果的に抵抗した。その間、国民党軍は崩壊する一方であった。農村部における土地の画期的な再配分のみが農地人口の要求を満たして、抵抗のための社会的政治的基盤に農村を変身させることができた。

国民党軍部隊が喫した多数の敗北にも関わらず、ファルケンハウゼンは前雇用者の蒋介石に忠実であった。国民党政府がドイツ

と外交関係を断絶した後にも、当時ベルギー及び北部フランスの軍司令官であったファルケンハウゼンは「大戦争は（国民党にとつて）成功裏に終わる」と確信していた⁽⁴³⁾。しかし、彼の副官が戦後行なった次の発言のほうが現実的である。「ファルケンハウゼンの底無しの腐敗との戦いは、特に武器購入が絡んでいた場合は勝つことが不可能であった。盲人のように蒋介石は前へ進んだ、いがみ合う親戚と党関係者に囲まれながら……一九三九年までいくつかの戦闘に勝つことを手助けできたかもしれないが、国民党中国の運命は絶望的であった⁽⁴⁴⁾。」

他のいずれの外国顧問団以上にドイツの顧問団が蒋介石の支配の安定化に貢献し、日中戦争開始前後の中国の対日戦も助けたことは確かである。しかしながら、中国の近代化におけるドイツの役割は過大評価すべきでない。中国側はあるモデル、あるいは助言を採用するに当たり、まず自らの方法で作り替えていたからである。従って、ドイツ顧問団の影響を評価することは認識の問題である。その他の外国顧問団と同様、最終的には失敗したにしても、ドイツ人たちは多くの功績を残した。次の珍しい中国側の発言が事実が一番近いかもしれない。「ドイツの軍事援助が、中国がもらった唯一の現実的な軍事援助であった⁽⁴⁵⁾。」

註

(1) Jerry B. Seps, "German Military Advisers and Chiang

Kai-shek, 1927-1938." Unpublished Dissertation, University of California, Berkeley, 1972, p. 472.

(2) 中国のドイツ軍事使節団に関する史料については Bernd Martin, ed., *Die deutsche Beraterschaft in China 1927-1938. Militär, Wirtschaft, Außenpolitik* (Düsseldorf, 1982) の「参考文献」を参照。この論文集の半分は英語で書かれている。旧ドイツ民主主義共和国のポツダム文書館に“Deutsche Botschaft Peking”の名で、中国へのドイツ軍事使節団の文書が保管されていたが、当時は西側の研究者は使用することができなかった。従って、上記論文集には含まれていない。この史料は現在、連邦文書館 (Bundesarchiv) において閲覧可能であるが、ボン (Bonn) にある外務省の政治関係文書館 (Politische Archiv von dem Auswärtige Amt) 及びフライブルク (Freiburg im Breisgau) にある連邦文書館／軍事文書館 (Bundesarchiv/Militärarchiv) にある史料の大半に補完的なものでしかない。使節団の文書は、使節団そのものがドイツに召喚された一九三八年にドイツに送り返された。その史料は主席顧問の副官に保管され、一九五八年に連邦情報局 (Bundesnachrichtendienst) に引き渡されたが、その後行方不明になったようである。

(3) 著者自らの南京第二文書館への訪問、一九八八年六月。Wu Shou Tian, “German Military Advisers and the Chiang

Kai-shek Regime” (原文は中国語), *Republican Archives I* (1988), pp. 89-98 は中国側の文書に基づいている。Zhang Xian Wen and Ma Zhendu, “Zu Aktenlage und Forschungsstand der deutsch-chinesischen Beziehungen in der Republikzeit” in Mechthild Leutner, ed., *Politik, Wirtschaft, Kultur: Studien zu den deutsch-chinesischen Beziehungen* (Münster, 1996), pp. 369-384 も参照。ただし、ドイツの顧問団に関する真剣な研究は中国でも台湾でもされていない。中国社会科学院の世界史研究所が一九八八年にドイツ語の論文集の翻訳を手がけたが、政治的な状況により延期された。台湾の文書館には役に立つ史料もある (特に蒋介石の私文書を保管している党文書館にて) が、現在のところドイツ顧問団に関する学術研究はされていない。蒋介石の私文書はまだ全ての研究者に対して非公開である。〔著者の報告「独中関係の史料に関する台湾の文書館について」 (“Bericht über die Archivsituation in Taiwan betreffend Quellen zu den deutsch-chinesischen Beziehungen,” Manuscript 16 June 1994) を参照。〕 Ma Wen-ying Wun の論文「戦間期における在中国ドイツ顧問団」 [*Die deutsche Beraterschaft in China in der Zwischenkriegszeit 1927-1938* (Münster, 1995)] は全く信頼できない。この論文は新しい史料に基づくものではなく、むしろ上記論文集(註

2を参照)にかなり依存しているので、一種の盗作と考えて
もよい。

- (4) これらの文書は当初、ニューヨーク州ヴァッサー大学
(Vassar College) の Liang His-huey 教授に保管及び整理
されていた。彼の論文「中国—ドイツ関係。中国とドイツの
間のアレキサンダー・フォン・ファルケンハウゼン、一九〇
〇—一九四一年」〔“The Sino-German Connection.
Alexander von Falkenhausen between China and
Germany, 1900-1941” (Assen, 1978) を参照。これらの文書
は一九八〇年、フライブルクにある軍事文書館に移転され、
現在は無条件で研究者に開放されている。

- (5) Oberkommando des Heeres, Nr. 1292/39, *Die Schlacht
bei Shanghai*, Bundesarchiv/Militärarchiv (hereafter
“BA/MA”) Freiburg. この小冊子は六五〇部、戦闘師団レベ
ルまでのドイツの軍事組織に配布された。しかし、それは「公
用のため」(Nun für den Dienstgebrauch)であった。部分
的にも出版することは厳禁されていた。ドイツ人の証言に基
づいたこの上海会戦の記録がヨーロッパにおける開戦の直前
まで現われなかったことが示すように、ドイツ陸軍の士官た
ちは遠い中国での出来事にあまり関心がなかったようである。

- (6) Roland Felber, “Sun Yat-sen und Deutschland. Zum
Platz Deutschlands im gesellschaftlichen Denken Sun

Yat-sens,” *Wissenschaftliche Zeitschrift der Humboldt-
Universität zu Berlin*, Reihe Gesellschaftswissenschaften,
37 (1988), pp. 121-147.

- (7) 中国におけるシュムペーにについては Adolf Vogt, “Oberst
Max Bauer (1928-1929)” in Martin, *German Advisers*, pp.
95-105 を参照。

- (8) William Wei, “The Role of German Advisers in the
Suppression of the Central Soviet, Myth and Reality” in
Martin, *German Advisers*, pp. 175-186. ただし、シュムペー
問の役割をかなり限定的に捉える Wei 氏の解釈は彼以外の共
著者には共有されていない。

- (9) Hans Meier-Welcker, “Generaloberst Hans von Seeckt
(1934-1935)” in Martin, *German Advisers*, pp. 116-134.

- (10) 第一次上海事件については Seps, “German Advisers,” p.
217 及び Billie R. Walsh, “The German Military Mission
in China 1928-1938,” *Journal of Modern History*, 46 (1974),
pp. 502-513 を参照。政治的背景については Gabriele
Ratenhof, *Das Deutsche Reich und die internationale
Krise um die Mandschurei 1931-1933* (Frankfurt am Main,
1994), p. 121ff. を参照。

- (11) 関連の統計は Lloyd Eastman, *Seeds of Destruction:
Nationalist China in War and Revolution* (Stanford, 1984)

p. 130 を参照。

Group Under Falkenhausen, Structure and Members” in

(21) Bernd Martin, *Japan and Germany in the Modern World*

(Oxford and Providence, R. I., 1995) を参照。特に、第三部

“The Emergence of the ‘Fascist’ Alliance” を参照。

(13) フアルケンハウゼンと蒋介石の関係については、Liang

Hsi-huey, “Alexander von Falkenhausen,” in Bernd

Martin, *German Advisers*, pp. 135-146 を参照。

(14) BA/MA, Falkenhausen papers, Journal No. 6874, Memo

9 March 1937, *Betrachtungen zur Verteidigung der Nordfront*.

(15) BA/MA N 246/42, Falkenhausen papers, *Memoiren*.

(91) Lloyd Eastman, “Nationalist China during the

Sino-Japanese War, 1937-1945,” in Lloyd Eastman, et al.

(ed.), *The Nationalist Era in China 1927-1949* (Cambridge 1991), pp. 115-117 (7 August 1937).

(17) BA/MA Falkenhausen papers, Journal No. 7391/I, *Plan für den Aufmarsch der Luftstreitkräfte*, 15 July 1937.

(81) BA/MA, N 218/1, Generalleutnant Hermann Starke, *Mein Kommando zur Kampfzone I in China, Mittelgruppe der Nordfront*, 22. September – 17. Oktober 1937.

(19) 第三六師 Major Schimmelfennig, 第八七師 Captain Meyer, 第八八師 Colonel Vetter. “The German Advisory

Martin, *German Advisers*, pp. 460-464 を参照。

(20) 戦闘については *Schlacht bei Shanghai*, Falkenhausen,

Memoiren 及び Frederik F. Liu, *A Military History of Modern China, 1924-1949* (Princeton, 1956), p. 112 を参照。日本との戦闘が始まった時点では、中央軍は主にドイツ製兵器で装備され、勢力は三十万名ほどであった。

(12) Liu, *Military History*, p. 104.

(22) Falkenhausen, *Memoiren*. 中国人は Qian Dajun 將軍であった。

(23) 会議については Falkenhausen, *Memoiren* 及び *Schlacht bei Shanghai*, p. 16 を参照。

(14) Falkenhausen, *Memoiren*. “Die, deren Kräfte nicht ausreichen, machen den halben Weg. Dir aber fehlt es an gutem Willen.”

(25) BA/MA, Falkenhausen Papers, Journal No. 8213/I, *Memo Erwägungen über die weitere Führung der Operationen an der Shanghai Front*, 19 November 1937.

(26) 戦術教官クルト・シュペーマン准将 (Generalmajor Kurt Speman) ‘戦術教官ヘルマン・シュタルケ少将 (Generalleutnant Hermann Starke)’ としてアルフレッド・シュートンスキウス少将 (Generalleutnant Alfred

Streccius) の三名。全員、南京の国防学院の教官であった。三名の査察報告は、一九五三年にシュタルケが作成した

“Mein Kommando zur Kampfzone I in China” (BA/MA N 218/1) 及び Falkenhausen, *Memoiren* を参照。

(27) Streccius, *Mein Kommando*. 三名の将官は一九三七年十月十七日、南京に呼び戻された。

(28) BA/MA, Falkenhausen papers, Journal No. 8334/I Memo *Kurze Beurteilung der Lage* from 15 December 1937. Martin, *German Advisers*, pp. 441-450 に所収。

(29) Liang, “Sino-German Connection,” p. 87 を参照。

(30) BA/MA, Falkenhausen papers, Journal No. 6468/I, No. 6481, No. 6521, letters from Falkenhausen to General Liu Guang, head of the military board, 16, 18, 24 December 1936.

(31) BA/MA, Falkenhausen papers, Journal No. 5972/I, *Betrachtungen zur Regelung der Kommandogewalt*, 6 September 1936.

(32) ドイツによる仲裁についてはかなり書かれている。未だに最も優れた研究は、Yu-hsi Nieh, *Die Entwicklung des chinesisch-japanischen Konfliktes in Nordchina und die deutschen Vermittlungsbemühungen 1937-38* (Hamburg, 1970). Youli Son, *China and the Origins of the Pacific*

War (New York, 1993), p. 95 ff. において言及されている。しかし、現在利用できる全てのドイツ、中国及び日本の史料を使った新しい研究はない。

(33) Eastman, *Seeds of Destruction*, p. 417.

(34) 前掲 note No. 25.

(35) Falkenhausen papers に於「南京事件」に関するいくつかのドイツ人の証言が含まれている。最も詳しいのは *Nankings Schicksalsstage 12. Dezember 1937 - 13. Januar 1938*.

(36) BA/MA, Falkenhausen papers, no Journal Number, dated “Hankow, den 1. Februar 1938.” ドイツ語の題名は “*Beurteilung der japanischen Wehrmacht auf Grund der Kämpfe in China seit Juli 1937*”

(37) Frank Dorn, *The Sino-Japanese War, 1937-1941. From the Marco Polo Bridge to Pearl Harbor* (New York, 1974), p. 62f.

(38) BA/MA, N 246/42, Falkenhausen, *Memoiren*.

(39) BA/MA, Msg 160/8, no Journal Number, Memo “*Zur Lage*,” 11 April 1938.

(40) Bernd Martin, “Germany between China and Japan,” in Martin, *German Advisers*, pp. 288-306.

(41) BA/MA, Msg 160/9, Editorial from *Dagongbao* from 26

May 1938. "Ganz gleich, welchen Kurs die deutsche Politik nimmt, die Freunde Chinas werden wir niemals vergeßen."

- (42) Eastman, *Seeds of Destruction*, p. 144. ジョセフ・ステイルウエル (Joseph Stilwell) を一九四四年十月に継いだウェーデマイヤーはドイツ系アメリカ人であったためにルーズベルト大統領に指名された。ウェーデマイヤーはベルリンのドイツ国防大学の講義を受講したことがあった。Albert Wedemeyer, *Wedemeyer Reports!* (New York, 1958), p. 49f. を参照。

- (43) BA/MA, Falkenhausen papers, letter Falkenhausen - Chiang Kai-shek, 4 July 1941.

- (44) BA/MA, Msg 160/27, Schmidtman papers, letter Krummacher (Falkenhausen's aide-de-camp) to Schmidtman, 21 May 1961.

- (45) Walsh, *The German Military Mission*, p. 512 に引用。
(元は一九四一年の発言。)

(平成十二年十月十八日、戦史部が担当して開催した研究会の講演原稿を翻訳したものである。)

◎筆者紹介◎

一九四〇年生まれ。マールブルク大学にて博士号取得。一九七六年からフライブルク大学歴史学部教授(近現代史)。同大学歴史学部長等歴任。 *Deutschland und Japan in Zweiten Weltkrieg* (Musterschmidt Verlag, 1969), *Japan and Germany in the Modern World* (Berghahn Books, 1995) など著書、論文多数。